

巻頭言

変化に対応できる生き物が生き残る

辻 靖 三



新年あけましておめでとうございます。

昨年来よりの国内外での大きな変化の兆候から、本年はどう動いていくか先の見通しがわからない状況の、変化の年となるでしょう。

表題は、19世紀の英国の自然科学者のダーウィンが「種の起源」で著した進化についての趣旨で、「この世に生き残る生物は、最も強いものか。そうではない。最も頭のいいものか。そうでもない。それは変化に対応できる生き物だ。」との意として、かつて首相の所信表明演説でも使われました。日本史上でも明治維新、戦後の復興等、大きな環境の変化にも日本は変化し発展してきました。今、この「生き物」を「建設産業」に置き換えてみましょう。

建設産業、特に公共部門が特化している土木事業についての周辺環境はどう変化しているのでしょうか。最大の変化は少子高齢化です。建設技能者の高齢化は毎年10万人減、入職者は他の産業との競争の中でどれだけ確保できるか、です。次は、今後の公機関の財政状況から、仕事の源資である公共投資の推移です。その背景としては、全国的にインフラ投資の進展から、近年は切実感が小さくなってきており、公機関内でも必要な魅力あるインフラ計画の立ち上げ、都市計画決定済・合意形成済のプランが少なくなっていることです。既整備済みの各種の大量なインフラも高齢化しつつあり、そのメンテナンスに公機関側の資金・人員が不足しており、自然的・人為的原因のトラブルの発生リスク、対応の是非のリスクが増大しています。公機関でのインフラ部門の職員は、従前より少数化で内容も多岐に亘り、民の活用を進めています。日々の業務を何とかこなしているのが実情だと思います。

建設システムでの公と民の受発注のシステムは、国土整備を全国的に大展開しだした、ほぼ半世紀前に基

本的な仕組みができて、公側、民側ともそのシステムの中で今日まで機能してきたのだと思います。しかし半世紀前と今とでは、公と民それぞれの体制、社会情勢は大きく変化しているのに、建設システムは基本的には変わってないことが、現在の建設特に土木について危機が迫っているのではないかと思います。建設産業がきちんと生き残るためには、変化に対応できるか否かの局面に来ているのです。

i-Constructionは、建設システムを将来に適応していく大きな目的のための最初の一步となるものであります。最先端の技術の実装が起因ではありますが、それをフル活用するためには建設生産システムの仕組みを見直すと更に生産性が向上することの道筋が見えてくることに繋がる大きな意義が含まれていると思います。それは、公側では、増大している業務内容を既定の人員・体制で行うには、調査・設計・工事・維持管理までの流れを一体化する方法や、民側の技術・体制を幅広い活用を組み合わせた現場実務方式を取り入れる等、これまでの仕組みを変えていく事例となることを期待しています。民側も人員・技術・機械等の体制の確保を行い、公側が必要とする技術・業務に対応していく方式にシフトしていくことで、全国各地で建設産業が維持発展できることに繋がると思います。

新しい仕組みで公・民とも人的な生産性が良くなり、その余裕ができたマンパワーを更なる変化に対応できる、しっかりと生き残る建設産業へと変化していく大事な一年でありますので、新年にあたり、皆さんとともに行動していきましようとお願ひしまして挨拶と致します。